2019年度ダイバーシティ海外派遣事業報告

大学院経済学研究科教授
橋野知子
2021年3月31日

派遣先について（2020年2月2日～28日）

- **Université Lumière Lyon 2　リヨン第2大学（フランス共和国）**

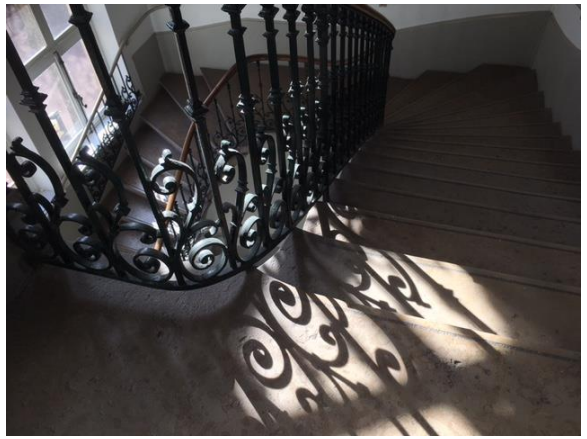
①受入教員（Dr. Pierre Vernus）の所属学部：Unite de Foundation et de Recherche,Tempts et Territories（歴史と地域に関する教育・研究集団）

＊Vernus先生とは、国際経済史学会（2016年、京都）で私が共同組織したパネルに来ていただき直接知り合った。そのうえでHashino and Otsuka (2016) *Industrial Districts in History and the Developing World* (Springer)に寄稿していただいた。

＊2019年3月には、明治初期の西陣の人たちのリヨンでの足跡をVernus先生のサポートのもとで予備調査（リヨン織物博物館アーカイブ）。

＊その後、次の国際経済史学会（2020年、パリ→2022年に延期）で、共同オーガナイザーとして、’Silk : trades, production and skills in a Eurasian perspective from the Seventieth to the mid Twentieth century’を組織。このテーマで共同研究を続行中。

②受入教員の所属する人文科学系の九つの大学・研究所が集まるLAHHLAと称する研究ユニット←実質、私はここのオフィスを借り、ここで共同研究ならびに自分が現在進めている研究の報告をした（2020年2月13日。次のページが報告要旨）。



上の写真：左・中は人文科学の建物。右は建物内の美しい螺旋階段。19世紀に建てられた陸軍の病院だった。下の写真：上の建物とつながっている。夕暮れの美しい季節。右は私が借りていた１室。うりぼーも同行。

From Lyon to Kyoto: Modernization of traditional silk-weaving district in Japan, 1887-1929

Seminar: Enterprise, market, and regulation

organized by LARHRA and Triangle, Lyon

Tomoko HASHINO

Graduate School of Economics, KOBE UNIVERSITY

February 13, 2020

調査項目から

①リヨン第二大学の女性役員の数・比率、部局別女性教授（相当職）の数・比率

	Number of females	Total numbers	Female ratio
President	1	1	100%
Executives or officers	5	10	50.0%
Professors（Department）	338	651	51.9%
	（39）	（84）	（46.4%）

②派遣先機関のジェンダー平等やダイバーシティに関する教育プログラムの実施状況について

- 大変先進的である。
- 共同研究者のVernus先生が、学部の歴史の講義で、ジェンダーの歴史は女性に限らず、人間の歴史となるべきという講義を行っている。
- LAHHLAのManuela Maltini先生が中心となって、ジェンダー教育を専門とする2年間のマスタープログラムを展開している。このプログラムは国際的であり、ヨーロッパ各国から学生を集めている。

③研究室運営におけるジェンダー配慮の状況について

Vernus先生がアレンジしてくださって、
Vice PresidentのWalker先生に面会
＜インタビュー・意見交換から＞
＋フランスにはジェンダー配慮の歴史と伝統がある。そのような歴史と伝統を作ってきた。
＋ジョブセミナー等、雇用にかかわるコミティは、男女比率を50：50にして、公正な判断ができるようにしている。

左手前：Professor Jim Walker (Vice President), 左奥：Dr. Pierre Vernus
右手前：橋野, 右奥：大塚啓二郎先生（夫が合流しました）
中央：うりぼー

④女性研究者の採用・昇任に有効と思われるプログラムについて

- 特別なことはしていない。
- ウエブサイト等で男女平等やダイバーシティに関して、啓蒙を不断に呼びかけ、そしてそのことを通じでスタッフもそれが当然のことであると認識している。

⑤本学のアンコンシャスバイアス払拭のために有効と思われる制度について

- まずは本学に「アンコンシャスバイアス」なるものが、どの程度あるのか詳細な調査が必要。
- その上で、何が問題なのかを明らかにして対策を立て、啓蒙活動をする。

＊1か月滞在し気づいたこと

- 第一は、所属していたところが、人文科学という分野だったこともあり、女性が多く目立った。しかも大変活気があり、元気であった。
- 借りたオフィスが人文科学系のさまざまなUnite（ユニットと彼（女）らは言う）が混在した建物で、分野間の交流を図っていた。
- 建物が、旧陸軍の病院（19世紀のもの）をリノベートして使っており、オフィスあたり面積が神大に比べて小さい。そのオフィスを2人で利用しているケースもある。その際もジェンダーで分けるようなことは、していない。
- ただし、建物の入り口のセキュリティは大変厳しい。

（**Cf. 本学**）

ジェンダーと関係なく狭いところをシェアする精神

- 興味深かったのは、トイレである。学部の学生用の建物は、トイレは男女別になっているが、研究等は男女一緒である（建物の入り口のセキュリティーは厳しい）。入り口は一つ、中にはいわゆる女子トイレが二つあり、男性・女性のマークがそれぞれ示されている。左はトイレの入り口、入ると左の写真のように。狭い学内、同じような工夫がされていると思われる。
- ここは男性も女性も

入れるトイレであり、<u>汚れるから男性も座ってするようにと女性から強く言われている</u>という（Vernus先生談）。

Cf. 女子トイレの少ない本学。特に兼松記念館。

まとめにかえて

- 今回、共同研究者とも対等な立場で議論し、フランスの大学の先進的な実態を目の当たりにして、新鮮な視点が得られた。
- 学部一回生の講義においても、ジェンダーやダイバーシティの問題について知見を深め、議論する場があってもいいのではないかと思った。
- 上記に関連して、「若い女性研究者」をどのように育てていくかという問題と同意に、長期的な視点に立って、学部時代から多様性を認め合う教育もきわめて重要だと認識した。
- 「この大学は大変進んでいるから参考になるよ」と言って、インタビューや資料集めに協力してくださったVernus先生、Vice PresidentのWalker先生に感謝したい。そして大学からこの事業での派遣の機会をいただいたこと、また参画室の方々のきめ細やかなご準備にも感謝する。